



## 目次

1. FDシンポジウム報告
2. 経営学部 公開授業 「財務論Ⅰ」森田洋教授
3. 授業アンケートの実施、および自己点検票作成のお願い

## FD シンポジウム 教職学連携で創るアクティブ・ラーニング

FD 推進部 上野誠也（部門長）

### 大学全体で取り組む重点テーマ

今年度の FD 推進部が掲げる重点テーマの一つを今回の FD シンポジウムで取り上げるようになった。その重点テーマとは「教員が教える教育から学生が学ぶ教育へ」である。現在、大学教育は、学生の「主体的学び」を促す教育を目指すように質的転換が要求されている。それを受けて当 FD 推進部では、一昨年度から重点テーマに「アクティブ・ラーニング」を取り上げている。大学教育を学生の受け身の学習から脱却し、学生が行動的に学修する教育手法の情報提供を続けてきた。

今までの重点テーマの取り上げ方は、教員の授業手法の改善に重きを置き、教員の自主的な改善が学生の主体的な学びに繋がることを期待していた。しかし、学生に主体性を望むならば、学生側にも改善を進める必要がある。さらに、大学全体で教育改善を進めるならば、職員や大学組織も取り組むべき課題があるはずである。

このような視点の転換を受けて、今回の FD シンポジウムのテーマに「教職学連携」を加えた。大学全体でアクティブ・ラーニングに取り組む姿勢を学び、大学全体でアクティブ・ラーニングを行うための課題を考える企画とした。

そのために、教員の立場、職員の立場、そして学生の立場から意見を述べてもらい、参加者全員がアクティブ・ラーニングを考える企画とした。

### 三部構成のシンポジウム

教員、職員、学生の立場からアクティブ・ラーニングを講演する講師を選んだ。学外で行われている学会や講演会で得た情報から人選を行った。さすがに学生へ講演を依頼するのは負担になるであろうから、本学の教育改善学生スタッフにグループ・ディスカッションの中で議論に参加してもらうことにした。三部の構成は以下の内容である。本稿に続くFDニュースレターの記事を参照していただきたい。



熱のこもった講演をする福田氏

第一部「主体的な学びを促す仕組み——人が育つ大学」高知工科大学 企画監 福田直史氏

大学レベルで取り組むアクティブ・ラーニングとは何かを考える講演を依頼した。高知工科大学は教育に関して特殊な大学であり、学生が「育つ」大学を目指している。学生をアクティブにさせる大学の取組みを紹介してもらい、現在本学で導入が検討されている4学期制にも言及していただいた。熱のこもった講演スタイルで、参加者を引き寄せる魅力を感じた。参加者には学修の活性化に繋がるために大学が組織的に行うことを考える時間となった。



参加者との会話を取り入れる杉原氏

第二部「深い学修を導くアクティブ・ラーニング」山形大学 基盤教育研究院 杉原真晃氏

教員レベルで取り組むアクティブ・ラーニングを考える講演を依頼した。杉原先生はアクティブ・ラーニングに関して多くの講演を行っており、第一人者である。参加者との会話を含めた講演は、まさに講演自体がアクティブ・ラーニングであった。表面的な学習では、学生が身につける内容が少ないことが指摘されている今日、より深い学修をさせるために、教員は何を考えるべきかを実践的な例を含めて講演いただいた。配布された資料は豊富であり、今後の活動に有益な情報が掲載されていた。

第三部 「教職学連携で創るアクティブ・ラーニング」グループ・ディスカッション

学生目線から見たよいアクティブ・ラーニングは何かを教育改善学生スタッフから発言してもらい、それをもとに、大学や教員が行うことは何かを考える企画であった。第一部、第二部の講演をふまえた議論を展開し、今後のFD推進活動や大学の改革に活かす提案を発言することを目的とした。「提案シート」を用意し、各グループで議論された提案を本シンポジウムの成果として公表することとした。

## FD シンポジウムの開催実績

教職学で取り組むテーマを掲げたので、教員・職員・学生の参加しやすい日として、休講日である常盤祭の最終日を開催日に選んだ。

開催日時：平成 25 年 11 月 5 日（火）

開催場所：本部棟 3 階大会議室

プログラム：

13:00-13:05 開催挨拶 小野センター長

13:05-13:10 開催趣旨 上野 FD 部門長

13:10-14:00 第一部「主体的な学びを促す仕組み～人が育つ大学～」

高知工科大学 福田直史氏

14:05-14:55 第二部「深い学修を導くアクティブ・ラーニング」

山形大学 杉原真晃氏

15:00-15:50 第三部「教職学連携で創るアクティブ・ラーニング」

グループディスカッション

参加者：教員 13 名、職員 6 名、学生 6 名

## アンケートから

参加者に本シンポジウムに関するアンケートを協力していただいた。5 段階評価の項目の一部を表 1 に示す。内容の構成や講師陣は高い評価を得ているが、時間配分の欠点が指摘されて

いる。なお、開催時期は意見が分かれており、今後の検討課題となっている。

自由記述欄にいただいたコメントを紹介する。コメントの最後の[]内は、教員、職員、学生の区別を付けている。

【質問】シンポジウムの良かった点

講師の人選。[教] アクティブ・ラーニングについて理解が深まった。[職] グループワークは楽しかった。[学]

【質問】シンポジウムの良くなかった点

「深い学修」をもっとレクチャーして欲しかった。[教] 情宣。[教] 時間配分。[職] 時間が少なかった。[学]

【質問】今後の教育活動への展開方法

学習促進の環境作りへ。[職] 大学として学生へ生きることの重要性を訴える。[職] 教授が求める学生が分かった。[学]

表 1 アンケート結果（抜粋）

質問項目	悪い ← → 良い				
	1	2	3	4	5
内容の構成	0	0	1	6	6
講師陣	0	0	1	3	8
時間配分	0	2	3	6	2
開催時期	0	1	2	0	8

## 第一部 主体的な学びを促す仕組み～人が育つ大学～

高知工科大学 企画監／入試・広報部長 福田直史氏

FD 推進部 小川昌文（教育人間科学部）

高知工科大学は、ユニークなカリキュラム、高い就職率、抜群の教育環境などで今話題の大学である。その大学の「企画監・入試広報部長」である福田直史氏の講演を聴いた。氏は、大学の設置から現在に至るまで、この大学の事務運

営の中心的な役割を担ってきた方であり、関西弁による親しみやすい話し方もあり、その内容は大変興味深いものであった。

## 講演の骨子

福田氏の主張は明快である。高知工科大学は、専門知識や技能を身につけさせることが目的ではなく、それらを通して「人が育つこと」すなわち「人間力」の育成を目指していること。また、建物や環境などのハードとカリキュラムなどのソフトは、いずれも主体的な学びを促すための「しかけ」にすぎない。すなわち、大学そのものが「主体的な学びを促す」装置になっているという内容である。以下、その「しかけ」について紹介する。

### (1) 建物

コンセプトは「人と人が交わる場」とし、講義室と教員研究室を渡り廊下でつないで学生と教員ができるだけ顔を合わせやすいように配置、また「コモンスペース」という「誰でも雑談からミニ授業まで自由に使えるコミュニケーションスペース」を設置している。教員の研究室はガラス張りであり、「先生の研究姿勢も丸見え」となっている。

### (2) カリキュラム

コンセプトは「長所をのびす」。そのために「全科目選択制」と「クォーター制」を柱としている。「全科目選択制」とは、卒業要件として「必修科目」を設置せず、すべて「選択科目」として履修させる制度である。この制度のメリットは、教員も学生も真剣勝負で授業に取り組めることにある。「必修科目制」は、卒業させるために教員が学生に「手加減」してしまう傾向があるので採用していない。

「クォーター制」は「1年を四期に分け、8週間を一期とする制度」であり、「一週間に1つの科目が2コマ進み、技術や知識を確実に身につけながら短期間でステップアップできる」メリットがあるという。教員にとっては、1学期間は授業を持たなくてもよいのでその間は研



ユニークなスライドの福田氏の講演

究に集中できるメリットがある。また、学生は1年間に4回学業の進展具合を判断できる利点もある。

### (3) インセンティブ

コンセプトは「その気にさせる」。教員に対しては、学生の評価をダイレクトに給与に反映させる。教員の給料はほぼ「学生の評価点×10倍」(90点=900万円)になる。学生に対しては、学会発表を積極的に支援し、年間約200名が世界中の学会で発表している。さらに、奨学金授与、表彰、特待生選抜を通して、学生の勉学意欲を促している。

### (4) アクティブ・ラーニング

コンセプトは「主体的な学びへの導入」。授業においては、積極的に学生が関与できるような方法を実践している。具体的には、クリッカーの導入、小テストの実施、社会人をゲスト講師として学び方を学ぶ「スタディスキルズ」の開催などを取り入れている。

## 感想

福田氏の講演を拝聴して、高知工科大学がいかに苦勞してわが国の大学の疲弊したシステムから脱却しようとしているのか、また絶えずよい方向へと努力しているのかを身をもって感じ

ることができた。冒頭で述べたように、全ては「学生の主体的な学び」を通じた「人間力の育成」のためであり、そのためであれば、既存の制度や習慣を捨てることも厭わないという強い信念が見られた。大学の教員として、またFDに関わる者として、筆者はこの理念と取り組みに多いなる賛同を表明したい。

横浜国立大学においても、規模や歴史は違えども、高知工科大学に見習って大学全体がさらにダイナミックに変化しなければならないと感じている。変化する行き先は、革新的で未知の

世界であると思われるかもしれない。しかし福田氏も述べたように、「考えさせ、原則を教えて、若者の雑多な知識を社会で生きる人の力に変えるのが大学教育」(ホワイトヘッド 1927)であり、「教育とは真実を直接伝えるものではなく、既存の知識の誤りを自らに発見させるものである」(プラトン)とすれば、むしろこの変化は大学教育の原点に回帰することであり、ギリシャ時代から変わることのない理念を忠実に実行に移すだけのことに過ぎないのではないだろうか。

## 第二部「深い学修を導くアクティブ・ラーニング」

山形大学基盤教育院／教育開発連携支援センター 杉原真晃氏

FD推進部 中本敦浩(環境情報研究院)

### FD講演に期待するもの

11月5日、常盤祭最終日、13:00より、本学事務棟会議室でFDシンポジウムが開かれた。招待された2人の外部講師による1時間ずつの講演を聴講し、特に、2人目の講演のレポートを行うのが私の役割である。

昨年度、私の学科からの割り振りでFD合宿に参加し、「グループ学習」についての講演を聞き、その演習にたいへん楽しく参加した。それで仕入れた手法を、私の授業や外部での講演活動にほんの少し取り入れてみた結果、たいへんに好評であり、今後とも、いろいろと試してみたいと思っている。

特に、そのときの講師の講演・演習の後、「あなたの授業において、グループ学習は手段ですか、それとも目的ですか」という質問はたいへん印象的だった。当然、講演前は前者しかあり得ないと考えていたが、講演後はちょっと違うものも見えてきた。

「FD活動では何らかの刺激があるはずだ。」そのような期待感の中、この度のFDシンポジウムに参加した。

### FDシンポジウム

1つ目の講演は、「主体的な学びを促す仕組み一人が育つ大学」というタイトルで、高知工科大学企画監/入試・広報部長の福田直史氏によるものであった。なかなかエネルギーが湧く講演であり、高知工科大学の斬新な教育システムについて紹介された。学生にしっかりと勉強をさせる仕組みが構築されており、学生に取っては多少厳しい面もありそうだが、彼らの研究生活は充実しているらしい。

そして、2つ目の講演は「深い学修を導くアクティブ・ラーニング」であり、山形大学基盤教育院／教育開発連携支援センターの杉原真晃氏によるものであった。その冒頭、講師の先生の学生時代に受講した「初等数学」の経験は面

白く、聴衆を引きつけていた。そして、アクティブ・ラーニングにおける一般論から講演は始まった。

## アクティブ・ラーニングとは

「アクティブ・ラーニング」とは、学生が能動的に学習を進めていくこと、または、学生が能動的に学習を進めるような授業形態を表すものである。これは、社会的にも科学技術的にも大きな構造的変化が起こり得る、予想困難な現代にコミットできる高度な創造性の育成を行う目的で導入が促されたという。

これを見ると、学習指導要領におけるいわゆる「新学力観」の記述や「総合的学習の時間」の達成目標などに大きく共通部分を持つものであると感じる。つまり、この学習方式は現代の考え方に合致するものであり、今後、大きく発展してゆくであろうことが容易に想像できた。

アクティブ・ラーニングでは、授業者が一方的に学生に知識伝達をする講義スタイルではなく、課題研究や PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）、ディスカッション、プレゼンテーションなど、学生の能動的な学習を取り込んだものである。

しかしながら、杉原先生の話によると、その授業形態のみに満足することなく、学生が実際に自ら頭を使って考えたり議論したりするような教育を行うことこそが大切であり、そのためには、まず各学生はその学習内容に対して、しっかりとした知識を持つことが大切であることが強調された。それらの知識に基づいた能動的学習活動を行うことにより、その知識は始めて「活きた学力」になるのだろう。

それを実現するためには、教員はしっかりとした狙いのある学習テーマとその達成目標を設定することが大切であり、事後の学生のレポート等の学習成果の質に対しても、論理的に詰めが甘い箇所を指摘したり、徹底的にこだわるこ

との必要性も説かれていた。

## 我々のアクティブ・ラーニング

自分の日々の教育活動において、アクティブ・ラーニングを実践しようと思うと、どのような場面で何ができるのか。

私の研究分野はいわゆる「理論研究」であり、フィールドワークも実験も必要ない、ただ、自分と向き合い、具体と抽象を行ったり来たりしながら、普遍的な法則を見つけ出すことを目指す。学生が徹底的にそれに没頭し、そのような活動が面白いと思えるのは、いわゆる「ゼミ」が始まってからであろう。



参加者に議論させる杉原氏の講演風景

ゼミは比較的うまく機能しているように思う一方、そのための準備である通常講義においては、その学習内容はあまり魅力的なものにはなりにくい。それに対して、何かアクティブ・ラーニングや他の方法で効果的な実践はできないものかと、日々、その教授方法を模索中であるが、冒頭に述べた「グループ学習」以外、その方法を見つけられてはいない。

\*\*\*\*\*

今回の講演では、アクティブ・ラーニングが大切にする教育的価値観やそれに関する注意事

項について知ることができた。でも、その真価を理解するには、いくつかの具体的な教育実践とその評価と分析が必要だろう。

どういったアイデアを用いると、受動的授業がその質をあまり下げることなく、能動的活動を伴う主体的授業に生まれ変わるのか。どのような話題や達成目標を設定すれば、学生の満足度が上がるのか。

今回は是非とも、そのような話を聞いてみたいと思った。

激動の社会において、人々や組織が変革を迫られる時代、大学教育もそのニーズに合わせて、柔軟に変化する必要がある。このようなFD活動を通じて、そのような動きを認知し、自らの変革のきっかけにしたいと思った。

### 第三部 教職学連携で創るアクティブ・ラーニング グループ・ディスカッション

FD推進部 上野誠也（部門長）

#### 教職学の混成グループ

第三部はグループ・ディスカッションを行い、アクティブ・ラーニングを実行するために、今後のFD活動や大学改革に活かす提案する企画である。参加者20名が5つのグループに分かれ、それぞれのグループでディスカッションを始めた。各グループには学生FDスタッフが1名加わっており、どのグループも教員・職員・学生の混成グループでディスカッションを始めることができた。日頃、話をする機会がない組合せであるにも関わらず、どのグループも和やかに議論が展開された。

まず、学生FDスタッフから学生目線から見たよいと思ったアクティブ・ラーニングの紹介があった。第一部から含めて、職員・教員・学生の立場から、アクティブ・ラーニングに対する意見が出そろうことになる。その後は、参加者が各自のアクティブ・ラーニングを提案し、その提案をグループでまとめ、用意された「提案シート」にまとめた提案を記入する予定であった。



教職学によるディスカッション

ところが、学生FDスタッフの発言から議論がいきなりスタートしてしまったグループもあった。積極的な議論が展開されているが、進行役としては、うまく議論がまとまるかが心配であった。しかし、教職学が区別なく議論している姿を見ると、無理に議論を止めてしまえば、望んでいたアクティブ・ラーニングに反することになるために、容認することとした。でも、時間の制約には勝てず、終盤で議論の結果を提案シートに残してもらうように指示を与えざるを得なかった。

## アクティブ・ラーニング実現への提案

グループで議論をするだけでは、相手の考えが分かるだけで、単なる雑談と変わらない。そこで、各グループでグループ・ディスカッションに出た提案の中から3件程度を選んで、提案シートに記入することにした。提案シートに記入することで、提案に対する議論を深めることを目的としていた。

提案シートに書かれた提案を紹介する。提案内容を大きく分類すると以下の4項目に分けられる。

- 1) 教育環境の改善提案
- 2) 教員と学生の関係の改善提案
- 3) 学生の意識改善提案
- 4) 学生間サポートの改善提案

それぞれの項目を説明するとともに、提案を紹介する。学生がアクティブにならないのは、阻害要因があるはずである。それが何であるかを調べ、過去の習慣にとらわれずに阻害要因を取り除く必要がある。

### 1) 教育環境の改善提案

学生が積極的に講義を履修しようとしても、同一時間に開講されていれば、一方を諦めざるをえない。また、現在の週に1回の講義では、履修の意欲が低下してしまう。これらを要因として以下を提案する。

【提案】4学期制のように週2回の講義を行うシステムを導入する。

【提案】同一時間に開講している他の講義が学べるように、講義の映像配信を行う。

### 2) 教員と学生の関係の改善提案

教員の考えと学生の考えが食い違うことが学生をアクティブにさせていない。教員が教えた方向と学生が学びたい方向が食い違うと、学

生の学ぶ意欲が低下する。これらを要因として以下を提案する。

【提案】教員と学生の双方向性を重視した授業を行う。

【提案】授業支援システムを用いて、毎回の授業のアンケートを取る。

【提案】教員と学生の間の成績評価の認識の違いを埋める。

### 3) 学生の意識改善提案

学生はカリキュラムに並んだ科目が何故学ぶ必要があるかが分からないと学修意欲が低下する。さらに入学時は、主体性を持って学ぶということ自体が理解できていない。これらを要因として以下を提案する。

【提案】教養教育科目を何故学ぶかを学生に理解させる。

【提案】学生の学ぶ意欲を学生自身が高いレベルで維持する。

【提案】入学時に、大学は主体的な学びの場であることを学生に伝える。

### 4) 学生間サポートの改善提案

自分が修得した内容を他人へ教えることで理解が深まることもある。また、学生同士が互いに刺激を与えることでもアクティブになる。このような機会が無いことが要因として以下を提案する。

【提案】先輩学生が後輩学生の相談役となる学生コミュニティーを作る。

【提案】学生同士のディスカッションを授業に取り入れる。

【提案】語学学修ではスピーチ大会を開催して学生が互いに批判し合う。

## 大学で進めるアクティブ・ラーニングへ

今回のグループ・ディスカッションは短時間

の制約のなかでの実施となった。それでも、各グループで様々な提案が出ている。当然のことながら、今回のディスカッションで出た提案はアクティブ・ラーニングを進める上での一部の提案でしかない。より多くの提案を考える必要がある。

重要なことは、教員だけでアクティブ・ラーニングを進める改善ではないことである。職員や学生、さらには大学という組織で取り組む必要がある提案もある。取組の規模は様々であるが、始められるところから順次進めていくことが望まれる。

## 経営学部 公開授業 「財務論Ⅰ」 森田 洋教授

鶴見裕之（経営学部）

### (1) 授業内容

森田洋教授の担当する専門科目「財務論Ⅰ」の目的は、財務のうちでも企業財務と呼ばれる分野に対してミクロ経済学のアプローチをとりながら、企業の財務戦略、財務行動を学び、企業の普段我々の見ない別の側面に対する理解を深めることにある。

公開授業は第13回「自社株買いと株主還元」の授業であった。森田先生は米国アップル社のケースを取り上げ、なぜ世界的な有力企業であるアップル社が自社株買いを行ったのか？なぜ自社株買いが「株主還元」に繋がるのか？といった疑問に対して、図示化されたバランスシートを活用し、ロジカルかつ分かりやすくその答えを解説された。

### (2) 教材

授業はパワーポイントと、その内容を印刷したレジュメを用いて行われている。このレジュメには授業内容の全て情報が記載されているわけではない。受講者には所々が空欄になっている状態で配布される。その空欄に当てはまる数式、数字や単語は授業中の解説と共に明かされ、受講者はレジュメを完成させてゆく。このよう

なレジュメの工夫により、受講者はよりアクティブな態度で授業に臨むことができるようになっている。更に授業のポイントがどこなのかを意識しながら、解説を聞くことができる。

またこのレジュメの冒頭には授業のポイントを3点にまとめた内容が記載されている。これにより受講者はこれから始まる授業の軸になる要素を頭に置きながら解説を聞くことができる。またレジュメの最後にもこのポイントが再掲されており、90分で学んだことを授業の最後に改めて確認できるようになっている。

その他の教材としては授業内課題のための問題用紙が配布された。受講者は授業終了時に提出するようになっている。この授業内課題の問題用紙は当日の授業に関する小問題が記載されており、内容の理解度チェック機能を果たしている。同時にリアクション・ペーパーを兼ねており、受講者は授業内容に関する質問や感想を記入している。

### (3) 授業方法

授業はまず前回の授業内課題の返却から始まる。森田先生と数名のTAが手分けし300名前後の受講者に毎回返却を行っている。なお、その

返却内容には、授業内課題の採点結果だけではなく、受講者からの質問や感想に対する返答が含まれている。この返答内容はTAではなく森田先生ご自身が全てに目を通され、1人1人の質問や感想に合わせて作成している。

また授業中の話し方も多くの教員に比べてゆっくりとした速さとなっている。そして、解説は図を交えつつ、かみ砕きながら説明されるため、小職のような財務論の素人であっても理論がスムーズに頭に入ってくる。なお森田先生によれば、授業には数式や複雑な理論が登場するため、受講者全員がしっかりとついて行けるように、という配慮に基づきこのような進め方をしている、とのことである。

授業の終了時には先述のリアクション・ペーパーを兼ねた授業内課題が回収される。

#### (4) 感想

森田先生の授業は多くの工夫で満たされており、大変分かりやすい。恐らく受講者に取ってみればこれだけでも十分に満足して授業に取り組めると思う。

ただし、森田先生はこのような高いレベルの授業に加えて、授業内課題の提出者全員の質問・感想にコメントを加えて返却されている。先生にお聞きしたところ、全員のコメントを作成するには約半日を要する、とのことである。ご自身の研究、委員会などの学務、学部・大学院の授業準備に加えて、毎週約半日のコメント作成時間を捻出するのは大変なことだと感じた。しかし、かつて財務論Ⅰを受講し、現在は放送局に勤める本学部卒業生は「大教室の授業はどうしても受け身にならざるを得ないが、森田先生の授業はリアクション・ペーパーを通じて返答をもらえる。結果、様々な質問を試みたくなり授業内容に関するニュースや書籍を自発的に読む機会が増え、企業財務に関心を持つようになった」と感想を述べていた。公開授業当日の受講者が熱心に先生の解説に聞き入る姿を見て、この卒業生のみならず同様の受講者が多数居ることを感じた。先生ご自身がコメントをご用意されることは大変なことであると感じると共に、その取組が学生に与える効果は非常に大きい、と感じた次第である。

## 授業アンケートの実施、および自己点検票作成のお願い

FD推進部

先生方におかれましては、毎学期、授業アンケートの実施にご協力いただき、誠にありがとうございます。FD推進部会では、平成23年度に「授業評価アンケート」の抜本的な見直しを行い、昨年度（平成24年度）実施分より以下3点の変更が反映されました：

- 1) 名称の変更：「授業評価アンケート」から「授業アンケート」へ。
- 2) 設問記載順の変更：自由記述欄を冒頭に。

「改善点」だけでなく「授業のよい点」についても記述を促す。

- 3) 自由記述返却時に「受講態度項目」の回答も付属

特に、2)の変更に伴い、先生方より「自由記述欄への記入が多くなった」とのお声をいただいております。

この授業アンケートの実施と共に「自己点検票」の作成もお願いしておりますが、これは、

「シラバス作成による授業の計画(P)⇒授業の実施(D)⇒授業アンケートによる授業の点検(C)⇒自己点検票の作成による授業の見直し・必要な改善(A)」という「よりよい授業づくりのPDCAサイクル」の一環として作成をお願いしているものです。平成19年度後期からの実施以来(平成19年度前期までは「授業改善計画書」との名称で実施)、自己点検票の作成率は低迷しておりましたが、本年度春学期分につきましては、授業アンケートを実施くださった先生方の内、約5割の方にご作成いただくことができました。なお、本年度より自己点検票はWeb(学務情報システム)にて入力・提出していただくことが可能となり、作成がより簡便になりました。

ご提出いただいた自己点検票は、大学教育総合センターのホームページにて学内限定で公開させていただいておりますが、これには、各々の先生方が(授業アンケート結果を受けて)どのような工夫や改善をしておられるのか情報を共有し合うことで、個々の教員レベル、また部局レベルでの更なる授業改善に活かしていただきたい、という思いが込められています。

この秋学期も、平成26年1月14日～2月13日に授業アンケートを、3月末に自己点検票の作成を実施いたします。先生方におかれましては、今一度その趣旨をご理解いただき、ご協力いただけますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。



本誌への原稿を募集しております。また、ご意見・ご感想をお寄せください。

YNU FDニュースレター No. 26

編集／横浜国立大学 大学教育総合センターFD推進部

作成担当：ニュースレター・ワーキンググループ

事務担当：教務課

問合せ先：saito.toshihiro@ynu.ac.jp

発行／平成25年 12月